高崎市文化財調査報告書第283集

善地・諏訪遺跡

－鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2011

高崎市教育委員会

例　言

1．本書は鉄塔建設に伴う善地・諏訪遺跡（高崎市遺跡番号 489）の発掘調査報告書である。
2．本遺跡は高崎市箕郷町善地字諏訪 1195 番地 1 に所在する。
3．発掘調査は平成 22 年 9 月 28 日から 10 月 15 日まで実施した。
4．本調査および整理調査は、高崎市教育委員会が、委託契約を締結した株式会社歴史の杜の協力を得て実施した。発掘調査から整理調査、報告書刊行に至るまでの費用は、エヌ・ティ・ティ・ドコモ株式会社群馬支店に負担していただいた。
5．発掘調査の体制は下記のとおりである。
　高崎市教育委員会　田口一郎　滝沢　匡　須田奈保子
　株式会社歴史の杜　調査担当　向出博之　調査補助　狩野剛一
6．本書の編集は向出が行い、執筆は第 1 章を田口が、第 2 ～ 5 章を向出が行った。
7．本調査による出土遺物・図面・写真は、高崎市教育委員会が保管している。
8．発掘調査および整理調査は次の方々が参加した（50 音順）。
　発掘調査：一場輝光、小池一美、高橋きよみ、高橋ともエ、橋爪太三郎、樋田すみ子、星野光雄
　整理調査：黒田和子、篠原信子、深井美紀
9．発掘調査および整理調査の実施にあたり、上記の他に下記の方々・機関からご指導・ご協力を賜った。記して感謝申し上げます（50 音順）。
　エクシオインフラ株式会社、エヌ・ティ・ティ・ドコモ株式会社、大久保治恵、小川卓也、小野和之、株式会社測研、後藤　孝、鈴木徳雄、高橋清文、田中治江、谷藤保彦、角田真也、富田孝彦、宮田忠洋、村上章義、山口逸弘、山下工業株式会社

凡　例

1．本書で用いた座標は、世界測地系を使用した。また、挿図中で示した方位は座標北である。
2．土層観察の色調は『新版標準土色帳』（2001 年版）による。
3．発掘調査と本書で用いた遺構略号は次のとおりである。
　土坑＝ SK
4．遺構および遺物実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。
・遺構実測図の縮尺：調査区全体図 1/80、調査区参考図 1/160、土坑 1/40 である。
・遺物実測図の縮尺：縄文土器・土製品は 1/3 を原則とし、小型のものは 1/2 である。石器は大型のものは 1/4、中型のものは 1/3、小型のものは 1/1 である。
5．本書で使用した地図は次のとおりである。
・第 1 図は国土地理院発行 1/25000 地形図「伊香保」「下室田」を合成し、50％縮小して使用した。
・第 3 図は高崎市発行 1/2500 都市計画基本図を使用した。
6．遺物図中のトーンは次の意味を示す。
　□：被熱による変色の範囲　▨：炭化物の範囲　断面図中の●：混和材に繊維を使用
7．縄文土器の計測値については以下のとおりである。
・器高や底径などはcmで示した。［　］で残存値を、（　）で推定値を示した。
・遺物の重量は g で示した。
8．土製円盤実測図の周囲の矢印は、研磨の範囲を示したものである。

目　次

例言・凡例
目次
第１章　発掘調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
第２章　調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
　第１節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
　第２節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
第３章　遺跡の立地と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
　第１節　遺跡の立地・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
　第２節　周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
　第３節　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
第４章　検出された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
　第１節　土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
　第２節　遺物包含層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
第５章　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
写真図版
抄録
奥付

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・３
第２図　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
第３図　調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
第４図　調査区全体図及び参考図・・・・・・・・・・・・・４
第５図　１号・２号土坑平・断面図及び遺物図・・・・・・５
第６図　調査区北壁断面図（上）及び東壁断面図（下）・・６
第７図　調査区断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
第８図　包含層上層出土遺物図・・・・・・・・・・・・・・８
第９図　包含層中層出土遺物図（１）・・・・・・・・・・・９
第10図　包含層中層出土遺物図（２）・・・・・・・・・・・10
第11図　包含層中層出土遺物図（３）・・・・・・・・・・・11
第12図　包含層中層出土遺物図（４）・・・・・・・・・・・12
第13図　包含層中層出土遺物図（５）・・・・・・・・・・・13
第14図　包含層下層出土遺物図・・・・・・・・・・・・・・14
第15図　試掘出土遺物図　・・・・・・・・・・・・・・・・14
第16図　表土及び撹乱出土遺物図　・・・・・・・・・・・・14

表　目　次

第１表　１号・２号土坑出土遺物観察表　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
第２表　包含層上層出土遺物観察表　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
第３表　包含層中層出土遺物観察表（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９
第４表　包含層中層出土遺物観察表（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第５表　包含層中層出土遺物観察表（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第６表　包含層中層出土遺物観察表（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第７表　包含層中層出土遺物観察表（５）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第８表　包含層下層出土遺物観察表　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第９表　試掘出土遺物観察表　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第10表　表土及び撹乱出土遺物観察表（１）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第11表　表土及び撹乱出土遺物観察表（２）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第12表　筭地・諏訪遺跡出土土器部位・層位別数量一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

第１章　発掘調査に至る経緯

平成 22 年２月、エクシオインフラ株式会社より高崎市教育委員会（以下市教委）にエヌ・ティ・ティ・ドコモ株式会社（以下事業者）が計画する携帯電話用基地局予定地の埋蔵文化財の状況について照会があった。市教委は、該当地は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、周辺では縄文～弥生時代の集落跡や再葬墓が調査された中善地遺跡等が所在することから、工事と埋蔵文化財保護との調整が必要な旨を回答した。

同年３月８日付けで土地所有者である後藤清氏より試掘調査申込書が提出されたのを受けて、市教委は同年４月 30 日に工事予定地の試掘調査を実施し、縄文時代の遺構・遺物を確認した。

試掘結果を受けて、埋蔵文化財保護について事業者と協議を行った結果、工事の計画変更は不可能ということなので、鉄塔建設部分に関して記録保存の発掘調査を実施することで合意した。

発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、株式会社歴史の杜に委託して実施することとなり、平成 22 年９月 24 日付けで高崎市長・事業者・歴史の杜の三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成 22 年９月 24 日付けで事業者と歴史の杜の二者で発掘調査委託契約が締結された。

第２章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

本遺跡の発掘調査は、鉄塔建設に伴う記録保存を目的として実施された。開発対象地の中で、調査の対象範囲となったのは約 29.16㎡である。重機による表土除去後、人力によるジョレンがけで遺構検出を試みた。確認された遺構は適宜土層観察用ベルトを残し、土の堆積状況や遺物出土状況に注意しながら掘り下げた。出土状況の記録が必要と思われる遺物については記録化を行った。遺物のとり上げについて、本調査では遺物包含層出土遺物を上・中・下の３層に分けてとり上げるよう努めた。

遺構の記録図面は、平面図・断面図を光波測距儀によるデジタル測量と、手取り実測の組み合わせで作成した。全体図は 1/40、断面図は 1/20 の縮尺で作成した。なお、記録図面作成の際に必要な標高や座標については、道路台帳から割り出した。写真撮影は、35mm一眼レフカメラでモノクロフィルムとリバーサルフィルムを使用し、デジタルカメラも併用した。

第２節　調査の経過

発掘調査は平成 22 年９月 28 日から同年 10 月 15 日の間で実施した。以下に発掘調査の概略を記載する。

９月 28 日　調査範囲の割り出し、ベンチマークの作成、器材の搬入を行う。
９月 30 日　重機による表土除去を行う。除去後にジョレンがけによる遺構確認を行う。
10 月１日　土色変化の認められる箇所を遺構とし掘り下げる。
10 月７日　調査区の土色変化の大部分は、自然地形に堆積した遺物包含層によるものと判明する。
10 月８日　遺構平面測量と断面測量を行う。その際に遺物出土状況も記録する。
10 月 12 日　高崎市教育委員会による終了確認が行われる。調査区全景写真を撮影する。撮影後、調査区北壁及び東壁のセクションを図化しながら調査区内の黒みのある部分を掘り、遺構・遺物の調査漏れがないかを確認する。
10 月 14 日　調査区埋め戻し。器材の搬出を行う。
10 月 15 日　重機の搬出を確認。残った器材を搬出し、発掘調査の全工程を終了する。

第3章　遺跡の立地と環境

第1節　遺跡の立地

本遺跡は高崎市箕郷町善地字諏訪1195番地1に所在する。箕郷町は平成18年に高崎市と合併した。この旧箕郷町は、西は旧榛名町・東は旧群馬町・南は高崎市・北東は旧伊香保町や榛東村と接しており、北西側には榛名山が聳え、町の中部は榛名山の裾野にあたり、榛名山川を境に東部と西部では異なる地形を示す。東部では、榛名白川と浄瑠川に挟まれた白川扇状地が、6世紀の榛名山の噴火に伴う土石流により形成された。一方で榛名白川西部は、榛名山による約20万年前の土石流で形成された十文字面があり、起伏に富んだ地形を成す。また井野川東部では、相馬ヶ原扇状地が約1万4000年前の群馬岩屑なだれにより形成された。

本遺跡の所在する善地・諏訪遺跡は榛名山東南麓に位置する。榛名山麓を源とする車川の支流である潮川により、深く開析された谷の西側にあたり、周囲は河岸段丘が発達している。第3図は調査区の位置を記したほか、周辺の河岸段丘を現地での観察と標高や地形図をもとに、高・中・低位の段丘として色分けしたものである。本調査区は中位段丘上にあり、西側の急峻な尾根が横断の緩い平坦面に変化する場所に位置する。潮川の流路は高位段丘付近から中位段丘付近へ移り、本遺跡が形成された時には、中位段丘より低い位置へと移っていたと思われる。

また調査区から南西方向にある月波神社へ向かって、5～60メートル程の所に沢がある。

第2節　周辺の遺跡

本遺跡（1）周辺の縄文時代遺跡について概観すると、草創期後半とされる石器が田島遺跡（14）で見つかっている。早期は、はるな郷遺跡（2）、長者久保遺跡（5）、大沼水遺跡（12）などが挙げられる。はるな郷遺跡の調査では遺物の層位的分布状況が確認され、上から順に加曽利B式・十三菩提式・茅山式・押形文と田戸式土器、撚糸文土器が出土した。

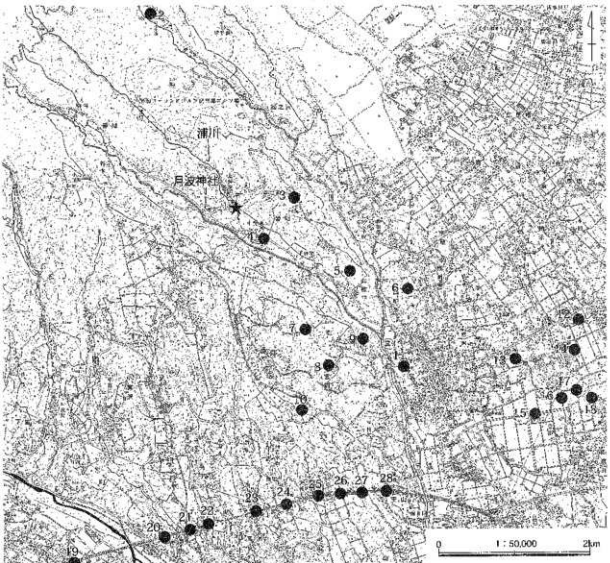
前期は、田島遺跡、風原遺跡（3）、中善地・宮地遺跡（4）、稲荷山遺跡（7）、西ノ原遺跡（8）、十三坊遺跡（10）、原山向遺跡（11）、神戸宮山遺跡（20）、三ツ子沢中遺跡（21）、高浜向原遺跡（22）、白岩溜久保遺跡（25）、白川笹塚遺跡（26）、白川傘松遺跡（27）、和田山天神前遺跡（28）などが挙げられる。和田山天神前遺跡では、覆土中に円礫を大量に伴う黒浜式期の住居がある。高浜向原遺跡、三ツ子沢中遺跡の住居からは、浅状耳飾りが検出された。稲荷山遺跡の諸磯式期の住居跡では、磨製石斧が北東・南東の隅に倒立の状態で検出された。遺物包含層からは、諸磯期のイノシシ形獣面突起を持つ土器が出土している。本遺跡に近い中善地・宮地遺跡では黒浜式期の土坑、諸磯b式期とc式期古段階の住居が検出された。

中期では、稲荷山遺跡、中善地・宮地遺跡、白川笹塚遺跡、白川傘松遺跡、風原遺跡、西ノ原遺跡、原山向遺跡、長者久保遺跡、三ツ子沢中遺跡、和田山天神前遺跡、田島遺跡、大清水遺跡、城山遺跡（6）、原山遺跡（9）、八反畑遺跡（13）、飯盛遺跡（15）、善龍寺前遺跡（16）、海行B遺跡（17）、海行A遺跡（18）、高浜広神遺跡（23）、白岩民部遺跡（24）などが挙げられる。中善地・宮地遺跡は群馬大学の調査で住居跡が検出され、箕郷町教育委員会の調査では、配石遺構が検出されている。この配石の内側に接するように、埋甕が検出された。白川傘松遺跡は住居が67軒にも及び、柄鏡形住居が出現したころ中央広場に配石遺構が現れる。なお土坑からは糸魚川産硬玉の大珠が出土し、三ツ子沢中遺跡では土坑から蛇紋岩製玉斧が出ている。白川傘松遺跡及び三ツ子沢中遺跡は、規模と遺物の内容から拠点の集落であったと考えられる。

後期以降は遺跡数が減少する。鬼形芳夫氏による分布調査でも該当遺跡数は少ない（鬼形 1988）。代表的な遺跡は高浜広神遺跡、和田山天神前、三ツ子沢中遺跡、稲荷山遺跡が挙げられる。堀之内式土器の破片が、本遺跡西側の月波神社南方の畑より出土した（箕郷町誌編纂委員会 1975）。和田山天神前遺跡では堀之内式期の土坑が1基ある。三ツ子沢中遺跡では称名寺Ⅱ式期と堀之内式期の柄鏡形住居が検出された。前者は巡結

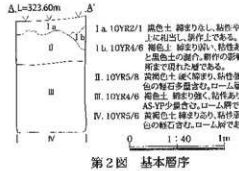
郡石囲施設を持ち、後者からは土偶が出土した。そして遺構外からは後期前半と考えられる土筌状土製品が出土している。

晩期は中里見根岸遺跡（19）で千網Ⅰ式該当の土器が遺物包含層より出土し、町内字白川からは安行式土器の破片が出土している（箕郷町誌編纂委員会 1975）。



1．木遺跡　2．はるな郷遺跡　3．鳳原遺跡　4．中茎地・宮地遺跡　5．長者久保遺跡　6．雑山遺跡　7．梅崎山遺跡　8．西ノ原遺跡　9．原山遺跡　10．十三坊遺跡　11．原山向遺跡　12．大浦水遺跡　13．八反畠遺跡　14．田島遺跡　15．飯塚遺跡　16．善龍寺前遺跡　17．海行谷遺跡　18．海行入遺跡　19．中里見根岸遺跡　20．神戸宮山遺跡　21．三ッ子沢中遺跡　22．高浜向原遺跡　23．高浜広神遺跡　24．白岩民部遺跡　25．白岩滝久保遺跡　26．白川聖塚遺跡　27．白川牟松遺跡　28．和田山天神前遺跡

第１図　周辺遺跡分布図

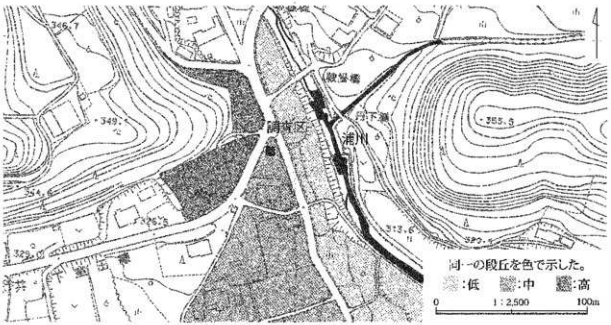


第２図　基本層序

第３節　基本層序

Ⅰａ層は畑の畝跡である。第６図にはⅠc･d層を記した。これらはⅠａ層と同様に現地表に相当する層である。

遺構確認面はⅡ層である。Ⅲ層に至るとAS-YPが混じる。Ⅳ層は灰白色の軽石を含むローム層で、Ⅱ・Ⅲ層のローム層とは質が異なる。



第3図　調査区位置図

第4図　調査区全体図及び参考図

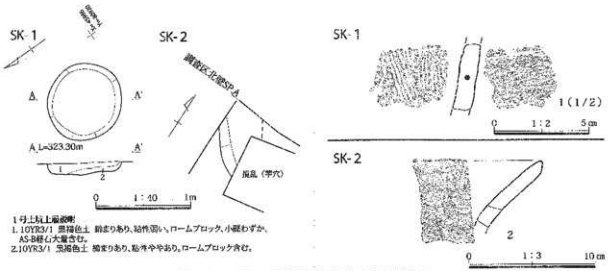
第４章　検出された遺構と遺物

本調査では上坑２甚と、縄文時代の遺物包含層（捨て場）が確認された。当初は１号住居、１・２号竪穴遺構としたものもあったが、これらはのちに自然地形の一部であることが分かった。

第１節　土坑（第５・６図、第１表）

１号土坑：調査区南側中央部に位置する。調査区中央部の攪乱より新しいものである。平面形は円形で規模は南北 90cm、東西 80cm、確認面からの深さは 12cmである。覆土から早期の条痕文系土器が出土している。

２号土坑：調査区北西隅に位置する。芋穴による攪乱を多く受けており全貌は明らかではない。平面形は楕円形と推測でき、規模は現存で長軸が 80cm、短軸は 24cm、確認面からの深さは 22cmである。なお、本土坑は段丘の一部である可能性も考えられ、検討の余地を残す。断面図は第６図調査区北壁断面図に記してある（第６図２・３層）。



第５図　１号・２号土坑平・断面図及び遺物図

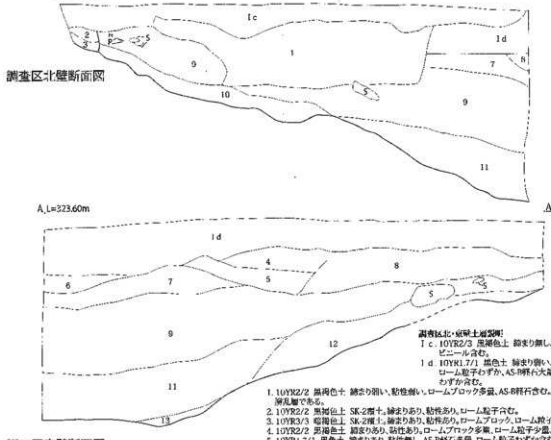
系色	時期 特徴	①焼成②色調③胎土④保存	成・整形技法の特徴、計測値（cm）、備考
1	縄文	①良好②褐色③角閃石・白色粒・繊維微量④体部片	内外：条痕文。内：上部が横位、下部が斜位の条痕文。平縁。
2	鉢	①良好②にぶい黄褐色③角閃石・白色砂粒④ほぼ完存	外：口縁部横位ナデ、以下斜い横位ナデ。壁付鍋。内：横位ナデ。

第１表　１号・２号土坑出土遺物観察表

第２節　遺物包含層（第６～16図、第２～11表）

遺物包含層について：遺物包含層（縄文時代の捨て場）は、本調査区の東半分及び北 1/3 程に広がる（第４図参考図）。出土遺物は縄文時代後期前葉の堀之内２式土器が中心である。遺物の出土状況は一ヶ所に固まって出てくるというよりは、覆土中にまんべんなく散らばっている状態で出土したが、調査区東壁中央付近で多少遺物がまとまって出土したのでその状況を記録した（第４図調査区全体図）。遺物は上・中・下の３層でとり上げた。北・東壁７層は包含層上層である（第６図）。AS-C 軽石を含む層であり、包含層中層に対する攪乱層と捉えられる。北・東壁８層は包含層中層であり、出土遺物の半数やナンバリングした資料はこの層に属す。北・東壁 11 層は包含層下層であるが、出土資料数は少量である。

調査区内３層は北・東壁７層に対応する（第７図）。１号住居上層、１・２号竪穴上層出土とした遺物がこの層に属す。調査区の大部分が現代の攪乱を受けており電機の爪跡も確認できた。攪乱部分からも遺物が出ており、本遺跡における縄文時代の捨て場はもう少し広い範囲であったと考えられる。



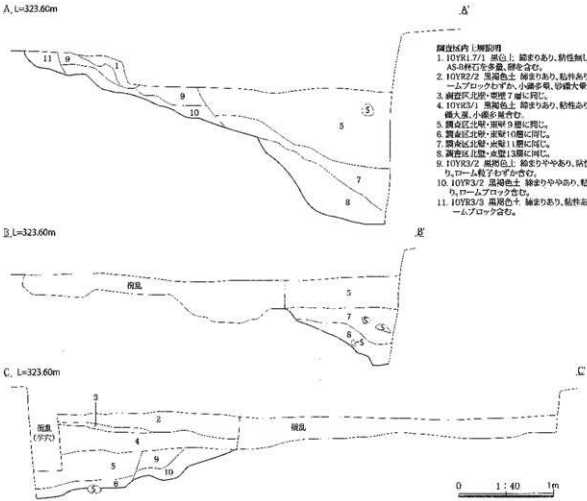
第6図　調査区北壁断面図(上)及び東壁断面図(下)

遺物について：包含層上層出土遺物は第8図に掲載した。同図16は包含層上・中・下層で接合した資料であり、本調査区の層位は良好ではないことがうかがえる。同図1は縄文時代早期に属す資料で、撚糸文系土器である。胎土に片岩を含む。同図2は阿玉台Ⅰb式土器と考えられる。同図3は称名寺式土器に該当する。同図4は鉢の環状把手とも考えたが、内面がきれいにナデられることから、ミニチュア土器の鉢の破片と判断した。

土体を占めるのは同図5～18の堀之内2式土器に該当するものである。その中でも8は小型化した口縁部の突起や内面の沈線が発達していることから堀之内2式新段階に該当する。同図20の石皿は、見た目より軽く感じられ角状に整形されている。

包含層中層出土遺物は、第9～13図に掲載した。ナンバリングした資料は、第9図2、第10図1、第12図8・9・15、第13図1・5である。第9図1は黒浜式土器に該当する。同図2は隆帯に沿うように角押文が施文されることから、阿玉台Ⅰb式土器に相当すると思われる。同図7は綿田弘実氏による“圧痕隆帯文”を持つ土器である（綿田1999）。包含層中層にて主体を占める資料は、第9図8～第12図11の堀之内2式土器に該当する土器群である。

これらの資料を概観するとき口縁部に着目すると、①真っ直ぐに立ち上がるもので、いわゆる朝顔形深鉢の形状をとるもの（第9図8～20）と②立ち上がる途中で外反するもの（第10図1・3～5・7・14）の2

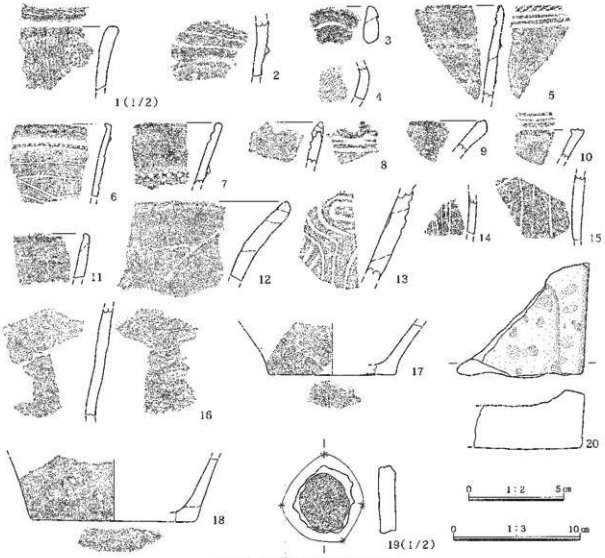


第７図　調査区断面図

考が目立つ。①は、口唇部が内屈するかしないか、口縁部の有刻隆帯の有無、体部文様の有無などの差はあるが、②に比べ薄手で丁寧に作られるようである。体部は沈線間に縄文が施される文様が見られ、内面には横走沈線や口唇部に刻みを持つ例も見られる（第９図 13 など）。②は明瞭なナデ痕跡を持つものが目立つ（第 10 図３～７）。これらは“軟質性ナデ痕土器”と呼ばれるものである（秋田 2005）。第 10 図 14 は頸部に横走沈線と「８」の字状貼付文を持つ深鉢で、いわゆる“小仙塚類型”に該当するだろう（鈴木 1999）。

第９図８・９は内面に黒色付着物があり、写真図版４にその状況を掲載した。当初は漆と考えたが、光沢をもたないことから漆とは断定できない。同図 18 は胎土に片岩を含む。同図 21 は加曽利Ｂ式土器の形状に似るが、本調査では他に加曽利Ｂ式に認定しうる資料が出ておらず、縄之内２式の範疇に収まるものと考えたい。同図 22 はいわゆる“石神類型”と呼ばれる資料で特徴的な連鎖状の入組文を持ち、南関東西部、中部甲信越と群馬県の西部域そして北陸地方まで広範に見られる文様である。これは各遺跡で少量ずつ出土する傾向にある（秋田 1996）。

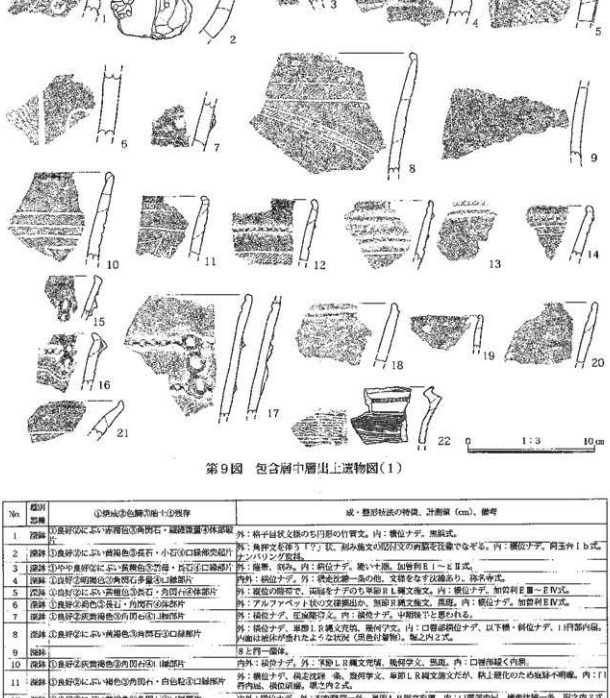
第 11 図９は、上器製作時の粘土の繋ぎ目が見えるものである。小さい穴が図面下部に並んでいる。写真図版にもこの様子を掲載した（写真図版５）。同図 11 は沈線施文後に縄文が施文される。このように体部下半が屈曲する器形は、北関東以外ではあまり例をみない器形である（谷藤 1990）。同図 12 は縄文が帯状に施文されたのちに縦・横位の研磨が施される。おそらく、底部に近い破片であり底部から磨き上げた際に縄文部まで達したものと思われる。同図 21、第 12 図１はいわゆる“福田類型”の注口土器口縁部片である。21 の突起は剥がれてしまっているが、突起の左右に小孔が対称に配置され横走沈線を伴う。１は破片の上下にわずかに沈線が見られるので、楕円形区画文であると判断した。文様はたどたどしく、器面も粗い。内面は指頭圧痕



第8図　包含層上層出土遺物図

No.	遺構	遺物	①地質②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴、計測値（cm）、備考
1	表採	①	①良好②に赤い赤褐色③黒片岩④口縁部片	口唇上面無文。外：撚糸文し。内：撚糸圧痕明瞭。ヒ明。
2	表採	①	①良好②褐色③雲母多量④体部片	外：異形に近ようにに角押文三条確認。内：横位ナデ。胴下台Ⅰb式。
3	表採	①	①良好②に赤い黄褐色③角閃石・黒、白色粒④胴部片	外：沈線文。内：ナデ。
4	同	①	①良好②黒褐色③長石④体部片	ミニチュア土器である。外：刷毛Ⅰ調文。内：横・縦位ナデ。
5	表採	①	①良好②に赤い黄褐色③角閃石④口縁部片	外：口唇部縦位研磨、有刻隆帯二条。内：口唇部縦位刷毛、横走沈線二条。堀之内２式。
6	表採	①	①良好②に赤い黄褐色③角閃石④口縁部片	内外：横位ナデ。外：有刻隆帯一条、単節Ⅰ R 調文充填、幾何学文。口唇部内屈。堀之内２式。
7	表採	①	①良好②灰褐色③角閃石④口縁部片	内外：口唇部横位研磨。外：有刻隆帯一条、以下横位ナデ。内：横走沈線二条。堀之内２式。
8	表採	①	①良好②に赤い黄褐色③角閃石多量④口縁部片	外：斜位ナデ。内：横走沈線三条。突起は横走沈線後文後に貼り付け、赤彩痕跡あり。堀之内２式前後間。
9	表採	①	①良好②に赤い黄褐色③角閃石・白色粒④口縁部片	内外：口唇部下半を横位ナデ、以下横位ナデ。
10	表採	①	①良好②に赤い黄褐色③角閃石多量④口縁部片	口唇上面、横走沈線一条。内外：横位ナデ。外：赤彩。
11	同	①	①良好②に赤い黄褐色③角閃石・白色粒④口縁部片	外：斜位ナデ、煤付着。内：横位ナデ、ナデ痕跡明瞭、口唇部沈線状に凹む。
12	表採	①	①良好②に赤い黄褐色③角閃石④口縁部片	内外：横位ナデ。
13	同	①	①良好②に赤い黄褐色③角閃石④体部片	外：撚糸文。「条一単位の羽状文、集合沈線。煤付着。内：横位ナデ。堀之内２式。
14	同	①	①良好②褐色③角閃石④体部片	外：単節Ⅰ R 調文施文の七六条一単位の羽状文。内：ナデ。
15	表採	①	①良好②に赤い黄褐色③角閃石④体部片	外：単節Ⅰ R 調文充填、幾何学文。煤付着。内：ナデ。堀之内２式。
16	表採	①	①良好②に赤い黄褐色③角閃石④体部片	外：斜位ナデ。内：横・斜位ナデ痕跡明瞭。
17	表採	①	①良好②褐色③角閃石・白色粒④底部 10%	外：斜位ナデ。内：横位ナデ。縄代圧痕。
18	表採	①	①良好②褐色③角閃石・白色粒④底部 10%	外：ナデのち入念に縦位研磨。内：ナデ。縄代圧痕。器高：(4.9)、底径：(13.0)。
19	土製円盤	①	①良好②黒灰色③白色粒④一部欠損	内部。全面研磨。断位：高坏体部。長軸：3.5、短軸：3.1、重量：11 g。
20	石面	④	④破片	安山岩製。縦面及び側面は、敲打と研磨により角状を成す。正形の研磨は見られない。長さ：[9.0]、幅：[8.0]、厚さ：4.6、重量：326g。

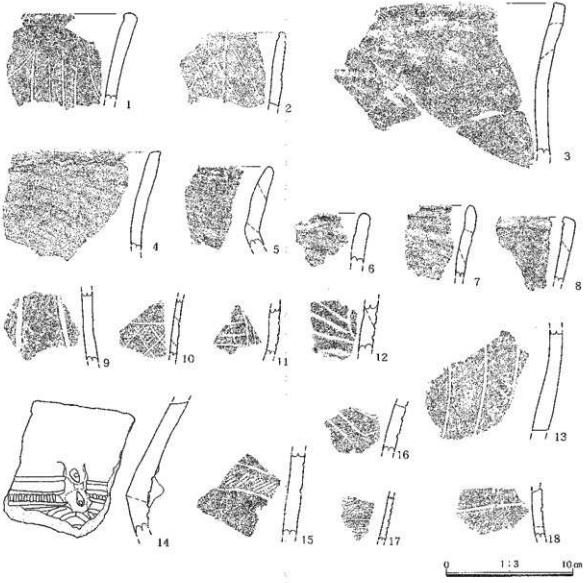
第２表　包含層上層出土遺物観察表



第9図　包含層中層出土遺物図（1）

No.	遺構番号	①焼成②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴、計測値（cm）、備考
1	溝跡	①良好②にぶい黄褐色③角閃石・雲母含④口縁部	外：格子目状文様のち円形の竹管文。内：横位ナデ。黒斑式。
2	溝跡	①良好③にぶい黄褐色③長石・小石④口縁部突起片	外：角押文を伴う「T」状、渦み盛文の間隙を沈線文の両脇を沈線でなぞる。内：横位ナデ。胴至内１ｂ式。ナンバリング記録。
3	溝跡	①やや良好②にぶい黄橙色③雲母・石②口縁部片	外：隆帯、刻み。内：横位ナデ、磨いて撫。加曽利Ｅⅰ～ⅡＢ式。
4	溝跡	①良好②明褐色③角閃石④黒曜石⑤縄文	内外：横位ナデ。外：横走沈線一条の他、文様をず沈線あり。称名寺式。
5	溝跡	①良好②にぶい黄橙色③長石・角閃石④体部片	外：縦位の隆帯で、両端をナデのち半裁ＲＬ縄文施文。内：横位ナデ。加曽利ＥⅢ～ⅣＢ式。
6	溝跡	①良好②明色③長石・角閃石④体部片	外：アルファベット状の文様横出小、無節Ｒ縄文施文、黒斑。内：横位ナデ。加曽利ＥⅣ式。
7	溝跡	①良好②灰黄褐色③角閃石④口縁部片	外：横位ナデ、圧痕隆守文。内：横位ナデ。中期後半と思われる。
8	溝跡	①良好②にぶい黄褐色③角閃石④口縁部片	外：横位ナデ、単節ＬＲ縄文充填。幾何学文。内：口唇部横位ナデ、以下横・斜位ナデ。口唇部内面。内面は補修が施れたような状況（黒色付着物）。幅2内2ｃｍ。
9	溝跡		8と同一個体。
10	溝跡	①良好②灰黄褐色③角閃石④口縁部片	内外：横位ナデ。外：単節ＬＲ縄文充填、幾何学文、黒斑。内：口唇部縦くの字。
11	溝跡	①良好②にぶい褐色③角閃石・白色粒④口縁部片	外：横位ナデ、横走沈線　条、幾何学文、単節ＬＲ縄文施文だが、横上縦化のため縦縦不明瞭。内：口唇内面、横位研磨。厚2内2ｃｍ。
12	溝跡	①良好②にぶい黄橙色③角閃石④口縁部片	内外：横位ナデ。外：有節隆帯一条、単節ＬＲ縄文充填。内：口唇部内面、横走沈線一条。幅2内2ｃｍ。
13	溝跡	①良好②灰黄褐色③角閃石④口縁部片	内外：横位ナデ。外：有節隆帯、横走沈線一条、無節Ｌ縄文。内：口唇部縦くの字刻目し刻み列ある。横走沈線一条。幅2内2ｃｍ。
14	溝跡	①良好②褐色③角閃石・白色粒④口縁部片	内外：横位ナデ。外：有節隆帯、横走沈線による縦文帯を挟み単節ＬＲ縄文施文、粘土硬化のため縦縦不明瞭。内：口唇内面、横走沈線一条。幅2内2ｃｍ。
15	溝跡	①良好②褐色③角閃石④口縁部片	内外：横位ナデ。内面研磨痕。「B」の字状切り文。口唇部内面。幅2内2ｃｍ。
16	溝跡	①良好②褐色③角閃石・白色粒④口縁部片	内外：横位ナデ。外：有節隆帯と接続する「8」の字状貼付文、波状文か。口唇部内面。幅2内2ｃｍ。
17	溝跡	①良好②にぶい黄褐色③角閃石・白色粒④口縁部片	内外：横・斜位ナデ。外：有節隆帯二条、間孔を持つ二重の突起、単節ＬＲ縄文、黒斑広範囲。内：口唇形復か内面、横走沈線二条。幅2内2ｃｍ。
18	溝跡	①良好②にぶい黄橙色③長石・片岩④口縁部片	外：横・斜位ナデ。上段部帯上切り目が今年指押さえ、単状上具でナデ込み、後年作出。内：ナデ。
19	溝跡	①良好②にぶい黄褐色③角閃石④口縁部片	外：ナデのち縦位研磨、黒斑。内：横位ナデ、口唇内面。
20	溝跡	①良好②にぶい黄褐色③角閃石・砂粒④口縁部片	内外：口唇部下単位横ナデ。外：粗い斜位ナデ、指頭押痕明瞭。内：粗い横・斜位ナデ。
21	溝跡	①良好②黒褐色③角閃石・白色粒④口縁部片	内外：横位ナデ。外：横走沈線　条。内：口唇部内面。幅2内2ｃｍ。
22	溝跡	①良好②黒灰色③角閃石④口縁部片	内外：縦位ナデ。外：有節隆帯一条、横走沈線八条の下逆波状入組文の下横走沈線三条確認。幅2内2ｃｍ。

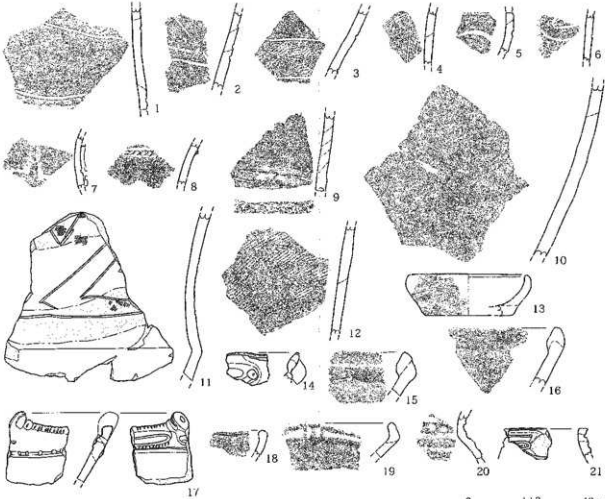
第3表　包含層中層出土遺物観察表（1）



第10図　包含層中層出土遺物図(2)

No.	挿図番号	①焼成②色調③胎土④備考	成・整形技法の特徴、計測値（cm）、備考
1	図版	①良好②にぶい褐色③角閃石・白色粒④口縁部片	外：横・斜位ナデ、四条一単位の櫛歯文、張縁が間に入る。内：横位ナデ、横走沈線一条。堅之内2式、ナンバリング系列。
2	図版	①良好②明赤褐色③角閃石④口縁部片	内外：横撫ナデ。外：斜格子状文様。内：横走沈線一条。堅之内2式。
3	図版	①良好②にぶい褐色③角閃石・白色粒④口縁部片	内外：口縁部下端横位ナデ。外：粗い斜位ナデ、煤付着。内：横位ナデ。
4	図版	①良好②褐色③角閃石・白色粒④口縁部片	外：粗い横・斜位ナデ煤跡明瞭。内：横・斜位ナデのち、横・斜位研磨。
5	図版	①良好②にぶい黄褐色③角閃石・白色粒④口縁部片	外：粗い横位ナデ。内：横位ナデのち口縁部、内面から絞り土盛りつける。
6	図版	①良好②褐色③角閃石④口縁部片	外：粗い横・斜位ナデ。内：斜位ナデ、指頭圧痕明瞭。
7	図版	①良好②にぶい黄橙色③砂粒多量④口縁部片	内外：口縁部下端横位ナデ、胎から粘土を盛りつけ、口縁部形成。外：粘土接合痕明瞭、横・斜位ナデ、煤付着。内：ナデ。
8	鉢	①良好②にぶい褐色③角閃石・白色粒④口縁部片	外：横位ナデ。内：横位研磨、横走沈線一条、直下に指頭圧痕明瞭。
9	図版	①良好②にぶい黄褐色③角閃石・白色粒・微砂④体部片	外：「H」状文様部分、単節LR縄文施文だが、粘土補充のため痕跡不明瞭。内：横位ナデ。
10	図版	①良好②黒褐色③角閃石・白色粒④体部片	内外：斜位ナデ。外：横走沈線一条、斜格子文。堅之内2式。
11	図版	①良好②暗灰色③角閃石④体部片	外：粒子状の文様を使用、櫛描文施文。内：斜位ナデ。
12	鉢	①やや良好②にぶい黄橙色③長石④体部片	外：円形ないし楕円状と思われる文様、集合沈線一条確認。内：横位ナデ、横走沈線一条。堅之内1式の模倣を図ると思う。
13	図版	①良好②明褐色③角閃石・白色粒④体部片	外：縦位沈線三条。内：横位ナデ。
14	図版	①良好②にぶい褐色③角閃石・白色粒④口縁部片	内外：横位ナデ。外：隆起に「8」の字状貼付文、横走沈線三条、縦位刻み、櫛歯文。堅之内2式。
15	図版	①良好②褐色③角閃石・長石④体部片	外：単節LR縄文施文、曲線状の文様、無文部はナデのち粗い縦位研磨。内：斜位ナデ。称名寺式。
16	図版	①良好②にぶい黄橙色②角閃石④体部片	外：幾何学文、単節LR縄文施文。内：横位ナデ、堅之内2式。
17	図版	①良好②黒色③角閃石④体部破片	外：幾何学文、単節LR縄文。内：横位ナデ。堅之内2式。
18	図版	①良好②にぶい黄橙色③角閃石・長石④体部片	外：単節LR縄文。無節。堅之内2式。

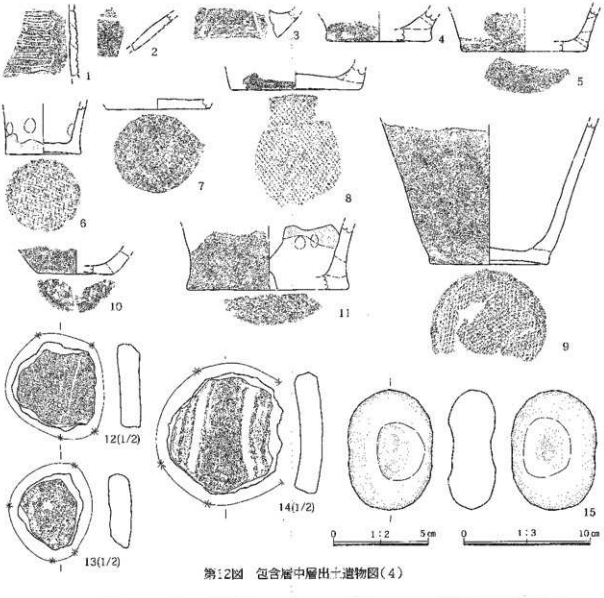
第4表　包含層中層出土遺物観察表（2）



第11図　包含層中層出土遺物図(3)

No.	部位 部種	①情況②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴、計測値（cm）、備考
1	深鉢	①良好②明褐色③角閃石・白色粒④体部片	外：沈線文、円文の中心部に刺突、弧線文、単節LR縄文施文だが、結十胡化のため痕跡不明瞭。内：横位ナデ、斜付痕。幅之内2式。
2	深鉢	①良好②黒褐色③角閃石④体部片	外：幾何文文、単節LR縄文施文。内：斜位ナデ。幅之内2式。
3	深鉢	①良好②にぶい黄褐色③角閃石④体部片	外：無文帯は横位研磨、胴部L縄文施文。結節痕、胡化物付着。内：横位ナデ。幅之内2式。
4	深鉢	①良好②にぶい黄褐色③角閃石④体部片	外：ナデ、等間L R縄文、幾何字文、斜行沿。内：斜位ナデ。幅之内2式。
5	深鉢	①良好②にぶい褐色③角閃石④口縁部片	内外：ナデ。沈線による文様。器本布式。
6	深鉢	①良好②黒褐色③角閃石④体部片	外：梅円状の文様描出か。単節LR縄文施文だが、結土胡化のため痕跡不明瞭。内：ナデ。幅之内2式。
7	鉢	①良好②にぶい黄褐色③角閃石・白色粒④胴部片	内外：ナデ。外：隆帯が垂下し、「8」の字状貼付文と隆帯、横走沈線一条。幅之内2式。
8	深鉢	①良好②褐色③角閃石・長石④体部片	外：斜位ナデ、有刻隆帯一条。内：横位ナデ、指頭圧痕明瞭。幅之内2式。
9	深鉢	①良好②にぶい黄褐色③角閃石・白色粒④口縁部片	外：粗い横・斜位ナデ、黒斑。内：横・斜位ナデ、火襷。下部顕著に、結土を掻合した痕跡。
10	深鉢	①良好②にぶい褐色③角閃石・長石④体部片	外：縦・斜位ナデ、被熱による黒色変化、胡化物付着。内：横位ナデ、ナデ。
11	深鉢	①良好②にぶい褐色③角閃石・砂粒・白色粒④体部片 25%	外：単節LR縄文、結土胡化のため痕跡不明瞭。下部はクズリ状の調整、被熱の砂粒痕、被熱痕あり。内：ケズリ状の調整、器位の砂粒痕の調整。器之内2式。
12	深鉢	①良好②明色③角閃石④体部片	外：横位ナデ、単節L X縄文を背景縄文のも現存前述。内：斜位ナデ。
13	浅鉢	①良好②明赤褐色③角閃石④口縁部～底部 20%	内外：横位ナデ。口径：(9.5)、器高：3.2、底径：(3.4)。ミニチュア土器である。時期不明。
14	深鉢	①良好②明色③白色粒④口縁部片	外：粘土の粘着沈線と貼付する円孔を持つ突起。内：口縁部は外傾し段がつく。
15	深鉢	①良好②明茶褐色③角閃石・白色粒・砂粒④口縁部片	外：横位ナデ、横走沈線一条。内：横位ナデ。幅之内1～2式。
16	鉢	①良好②にぶい黄色③角閃石・白色粒多量④胴部片	内外：丁寧な横位ナデ。
17	鉢	①良好②にぶい赤褐色③角閃石④口縁部片	外：有刻隆帯一条。内：貫通孔と盲孔をもつ「8」の字を意識した突起は、口唇部と右側隆帯に接続。口唇部に結び列。幅之内1～2式。
18	深鉢	①良好②にぶい黄褐色③角閃石・白色粒④口縁部片	波状口縁。外：横位ナデ。内：横・斜位ナデ。
19	深鉢	①良好②にぶい黄褐色③角閃石・白、赤色粒④口縁部片	波状口縁。外：口唇部に横走沈線と接続する円文と鋸歯文施文、胡化物付着。内：横位ナデ、指頭圧痕明瞭。
20	鉢	①良好②にぶい黄褐色③角閃石・白色粒④口縁部片	外：幅太横走沈線四条、その沈線間に円形刺突列。単節LR縄文付う。
21	注口	①良好②灰黄褐色③白色粒・角閃石・長石④口縁部 20%	口唇上面、横位研磨、突頭部上面に突起痕跡。外：突起周囲に横走沈線と接続する円形刺突、胴部突起伴う相円文。内面は横位研磨、胴位ナデ。口径：(6.6)。幅之内2式。

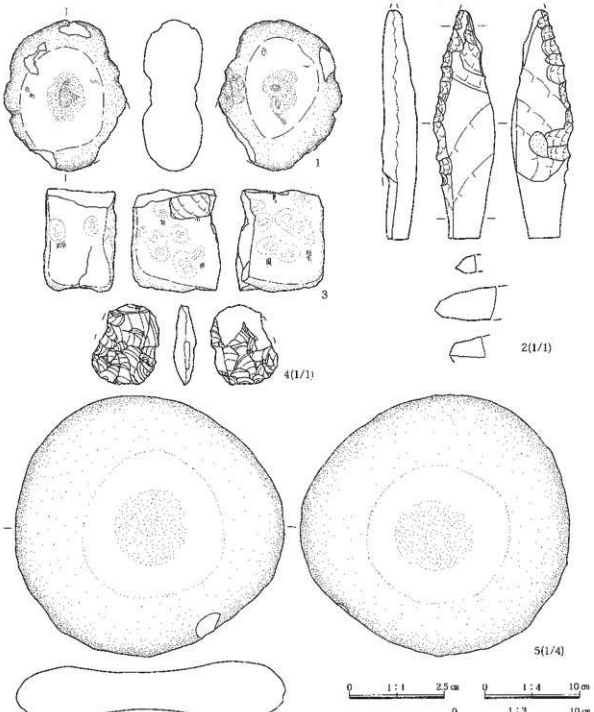
第５表　包含層中層出土遺物観察表（３）



第12図　包含層中層出土遺物図（4）

No.	種別器種	①成形②色調③胎土④残存	底・整形技法の特徴、残存値（cm）、備考
1	注口	①良好②黒褐色③角閃石④注口部上下部片	外：内部に孔部（巻を作る、ただたどい粘土紐状に巻き上げ痕。内：指頭圧痕明瞭、横位ナデ。極之内2式。
2	注口	①良好②灰黄褐色③角閃石・長石④体部片	外：丁寧なナデ、孔部で区画された中に刺突列がめぐる文様、黒縁。内：斜位ナデ。極之内2式。
3	注口	①良好②明褐色③角閃石・赤石④底下部40%	三角形を呈する。外：丁寧。内：ナデ。極之内2式。
4	深鉢	①良好②にぶい黄色③角閃石④底部25%	外：横位ナデ。内：ナデ。器高：(1.9)、底径：(8.2)。
5	深鉢	①良好②明赤褐色④角閃石④底部25%	外：ナデ、赤彩。底部に縦代圧痕。内：横位ナデ。器高：(3.0)、底径：(10.0)。
6	深鉢	①良好②にぶい黄褐色③角閃石・白色粒④胴部完存	外：横位ナデのち縦位研磨、被熱痕あり、底部は縦代圧痕、黒斑が中心にある。内：横位ナデ。器高：(4.0)、底径：5.9。
7	深鉢	①良好②明褐色③角閃石・石英④底部は縁完存	外：斜・横位ナデ。器高：(0.9)、底径：(8.0)。
8	深鉢	①良好②にぶい褐色③角閃石・白色粒④底部80%	内外：横位ナデ。底部は、縦代圧痕。器高：(1.5)、底径：(10.7)。ナンバリング資料。
9	深鉢	①良好②にぶい黄褐色③角閃石④体部下半～底部75%	内外：縦代ナデのち斜位研磨。底部付近は横位研磨。底部に縦代圧痕、中心と周囲で縦代の方向異なる。土器製作中に動かしたため、向きが変わったのだろう。底高：(11.1)、底径：(9.2)。ナンバリング資料。
10	深鉢	①良好②明褐色③長石・角閃石④底部30%	外：斜位ナデ。内：横位ナデ。器高：(1.6)、底径：(6.0)。
11	深鉢	①良好②にぶい黄褐色③角閃石④底部20%	外：横位ナデ、底部は縦代圧痕。内：指頭圧痕、横位ナデ、炭化物あり。器高：(5.1)、底径：(13.0)。
12	上製円盤	①良好②にぶい黄褐色③角閃石④完存	多角形。全面研磨。部位：深鉢体部。長軸：4.3、短軸：4.0、重量：26g。
13	上製円盤	①良好②にぶい黄褐色③石英④完存	円形。全面研磨。部位：深鉢体部。長軸：4.0、短軸：3.3、重量：13g。
14	土製円盤	①良好②明褐色③角閃石④完存	円形。全面研磨。部位：深鉢体部。長軸：6.3、短軸：5.7、重量：57g。
15	砥石	④完存	無数線状痕（砥目）が密。強弱の周期が認められる。両側面、浅く窪む。長さ：9.5、幅：6.7、厚さ：3.6、重量：336g。ナンバリング資料。

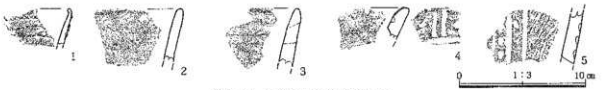
第6表　包含層中層出土遺物観察表（4）



第13図　包含層中層出土遺物図（5）

No.	種別 器種	①統成②色調③加工④残存	皮・側形技法の特徴、計測値（cm）、備考
1	凹石	① 一部欠損	黒曜石製。両面、二か所ずつ窪みあり。長さ：11.8、幅：9.7、厚さ：4.7、重量：721g、ナンバリング四箇。
2	ナイフ形	③ 一部欠損	黒曜石製。先端は少し残存。長さ：[6.0]、幅：[1.6]、厚さ：0.8、重量：10g。
3	敲石	① 一部欠損	黒曜凝灰石製。長面、左側面が潰らかである。浅い窪みがいくつかある。長さ：[8.1]、幅[6.9]、厚さ：5.3、重量：562g。
4	スクレイパー	① 一部欠損	黒曜石製。小型である。実測関表面上部は欠損し立つ。長さ：2.1、幅：1.6、厚さ：0.8、重量：1g。
5	石棒	④完存	凝灰輝石安山岩製。表裏とも使用。長さ：20.6、幅：21.2、厚さ：4.6、重量：2827g、ナンバリング四箇。

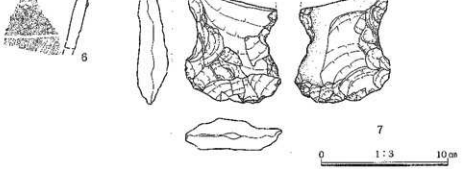
第７表　包含層中層出土遺物観察表（５）



第14図　包含層下層出土遺物図

No.	種別 器種	①焼成②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴、計測値（cm）、備考
1	鉢	①良好②赤褐色③角閃石・長石④Ⅰ縁部片	外：有刻線帯三条、「8」の字状貼付文が変化したものを貼付け。内：口唇内部、横位ナデ。縄之内２式
2	鉢	①良好②にぶい黄橙色③角閃石④口縁部片	内外：横位ナデ、研磨。
3	深鉢	①良好②黒褐色③角閃石④Ⅰ縁部片	外：粗い斜位ナデ。内：横位ナデ、横位研磨。
4	鉢	①良好②明赤褐色③角閃石・白④粘④口縁部片	内外：横位ナデ。口縁外端は、その後きれいにナデ込み穂を形成。内：擬沈線二条を装飾、内形刺突。
5	深鉢	①良好②にぶい黄橙色③角閃石・砂粒④体部片	外：三条一単位の櫛歯文で、刺突が加えられる箇所あり、単節Ｌｒ縄文。内：横位ナデ。

第８表　包含層下層出土遺物観察表



第15図　試掘出土遺物図

No.	種別 器種	①焼成②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴、計測値（cm）、備考
6	深鉢	①良好②赤褐色③角閃石④口縁部片	外：横位ナデ、有刻線帯一条、隆沈線一条、斜線が描かれる。内：斜位ナデ、横走沈線二条。
7	打製石器	④一部欠損	砂岩製。分厚部の石斧。面両からの打撃により敲著部は敲痕している。長さ：[9.2]、幅：7.3、厚さ：2.1、重量：16g。

第９表　試掘出土遺物観察表

第16図　表上及び撹乱出土遺物図

No.	種別 器種	①焼成②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴、計測値（cm）、備考
8	深鉢	①良好②灰黄褐色③角閃石④Ⅰ縁部片	突起は、内外から斜線が加えられる。外：ナデ、研磨。内：隆沈線六条装飾。縄之内２式前後期。
9	深鉢	①良好②にぶい黄橙色③角閃石④口縁部片	口唇部に、三角形の刻み や盲孔を持つ小突起が貼りつけられる。外：縦位ナデ。内：横位ナデ、隆沈線一条。縄之内２式前後期。
10	深鉢	①良好②にぶい黄橙色③長石・赤色粒④Ⅰ縁部片	波状口縁を呈する。外：隆沈線一条、その下を櫛歯状のくり、刺形刺突あり、無文帯をへて櫛形が見られる。内：横・斜位ナデ。Ⅰ指圧内側。縄之内１～２式。

第 10 表　表土及び撹乱出土遺物観察表（１）

No.	種別 器種	①焼成②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴、計測値（cm）、備考
11	深鉢	①良好②にぶい黄橙色③角閃石④口縁部片	外：粗い横撫ナデ。外面からの片側穿孔である補修孔。内：斜撫ナデ。
12	鉢	①良好②明赤褐色③角閃石・白色粒④口縁部片	口唇部肥厚。外：横撫・円状の文様、貫通孔あり。体部上横位ナデ。内：横位ナデ。
13	鉢	①良好②灰黄褐色③角閃石④体部片	外：隆起状の文様ないし集合沈線と考えられる文様、交差後交後部L R縄文施文、横化物付着。内：ナデ。
14	深鉢	①良好②黒褐色③角閃石④体部片	外：指状を持つ横位ナデ。横撫状跡一条、単節L R縄文後文の雲母文。内：横位研磨。煤之内２式。
15	鉢	①良好②にぶい黄橙色③角閃石・長石④口縁部片	口唇部肥厚し、沈線文状と円形の貫孔が、外：円形の貫通孔と盲孔が一つずつあり、横撫沈線が施文る。炭化物付着。内：横位ナデ。内外：横撫状。煤之内１式。
16	鉢	①良好②にぶい黄橙色③角閃石④体部片	外：蛇行する沈線文の結び目を縦横で繋ぐ、単節L R縄文。内：横位ナデ。煤之内１式。
17	深鉢	①良好②黒褐色③角閃石④体部片	外：横走沈線一条、縦撫線文。内：横位ナデ。
18	注口	①良好②灰黄褐色③角閃石④口縁25%	外：縦・斜位の研磨、部圧。内：ナデ。
19	鉢	①良好②明赤褐色③角閃石・長石④体部片	外：横位ナデ、筒巻状の文様、沈線圧文後施節L R縄文施文。内：斜位ナデ。
20	鉢	①良好②にぶい褐色③角閃石④体部片	外：単節L R縄文充填、筒巻状ないし横位突出文が施文。内：横位ナデ。
21	皿	①良好②明赤褐色③長石④体部片	外：単節L R縄文。内：横位ナデ。

第11表　表上及び攪乱出土遺物観察表（2）

		SK-1	SK-2	上層	中層	下層	試掘	その他	合計
体部	縄文			1 (0.13)	42 (5.26)	1 (0.13)	1 (0.13)	3 (0.38)	48 (6.01)
	無文			86 (10.76)	270 (33.79)	8 (1.00)	41 (5.13)	56 (7.01)	461 (57.70)
	無文・ナデ消明瞭			1 (0.13)	5 (0.63)			3 (0.38)	9 (1.13)
	有文縄文無し			8 (1.00)	22 (2.75)		10 (1.25)	11 (1.38)	51 (6.38)
	有文縄文有り			11 (1.38)	31 (3.88)	2 (0.25)	2 (0.25)	6 (0.75)	52 (6.51)
	有文条線				1 (0.13)				1 (0.13)
	条線						1 (0.13)	2 (0.25)	3 (0.38)
口縁部	縄文								0 (0.00)
	無文		1 (0.13)	8 (1.00)	18 (2.25)	2 (0.25)	7 (0.88)	5 (0.63)	41 (5.13)
	無文・ナデ消明瞭			1 (0.13)	11 (1.38)				12 (1.50)
	装飾有り（文様・突起など含む）			9 (1.13)	25 (3.13)		5 (0.63)	11 (1.38)	50 (6.26)
底部	無文				5 (0.63)				5 (0.63)
	網代痕			3 (0.38)	11 (1.38)			2 (0.25)	16 (2.00)
その他	上製円盤			1 (0.13)	4 (0.50)		1 (0.13)		6 (0.75)
器種・土製品	注口				6 (0.75)			1 (0.13)	7 (0.88)
	鉢			4 (0.50)	5 (0.63)	4 (0.50)		6 (0.75)	19 (2.38)
	浅鉢			1 (0.13)					1 (0.13)
	壺							1 (0.13)	1 (0.13)
他の時期		1 (0.13)		3 (0.38)	10 (1.25)	1 (0.13)	1 (0.13)		16 (2.00)
合計		1 (0.13)	1 (0.13)	137 (17.15)	468 (58.52)	18 (2.25)	69 (8.64)	107 (13.39)	799

第12表　善地・御詰遺跡出土土器部位・層位別数量一覧（堀之内２式土器を中心とした数量一覧）

※表中の数字は点数を示し、（　）は百分率を示す。百分率は全体数799点に対する値である。百分率は小数点第２位以下を四捨五入してある。

が明瞭であり、粗雑に作られたことがうかがえる。

第12図４～11は深鉢底部を掲載した。網代圧痕を残すものが多い。９は土器製作中に土器を持ちあげ、再度網代の上に置いたようで、異なる圧痕の向きが確認できる。６・８～11の外底面では器外面調整の素地土がはみ出した状況が観察できる。６は底部付近が被熱により変色する。11の内面には炭化物が付着している。

第12図12～14は土製円盤である。14は堀之内式土器の懸垂文が見られる。

第12図15～第13図は石器である。このうち第13図１は凹石であるが、窪みの周りは磨られている。同図３は浅い窪みがあるものの表面の摩滅が激しい。このことから砥石と判断した。同図５は石皿で両面とも使用される。同図２はナイフ形を呈すると考えられるが、側面が欠損しており全体形は分からない。同図４はスクレイパーと考えられる。これら２・４は他の石器に比べ古い様相を持つと考えられ、本遺跡から早期の土器が出ていることから、この頃に帰属する資料である可能性がある。

包含層下層出土遺物は第14図であるが遺物量は少ない。１は有刻隆帯が３条めぐる。また「８」の字状貼付文が隆帯と一体化しているようなあかりかたは、堀之内２式新段階に該当すると思われる。

試掘出土遺物は第15図である。試掘の深度は、包含層上層から中層の上部に該当するだろう。６は斜線が施文されるようである。７は分銅型の打製石斧である。装着部は実測図裏面からの打撃により破損している。

第16図は攪乱出土遺物（８～20）と表土出土遺物（21）である。このうち８は突起が丸みを帯び内外から斜線が施文され、内面の横止沈線が多条化していること、９は小型化した突起が施こされることから堀之内２式土器でも新しい要素を持つと考えられる。

第5章　まとめ

本調査では上坑2基と遺物包含層が確認された。遺物包含層の存在から付近に住居跡の存在が想定される。上坑は1号十坑が新しい時期のものである。2号上坑は全貌が明らかではないが、自然地形の一部である可能性もある。遺物包含層はどの層でも同じような特徴を持つ土器が見られ、3つの層から出土した資料が接合したことなどから、異なる時期の遺物が少量含まれるものの、本来は堀之内2式期の単純層であったものが、攪乱をうけたと考えることができる。

長野原町林中原Ⅰ遺跡4次調査SI01の出土遺物（宮田2010）や前中後遺跡Ⅰ～Ⅳ区の住居跡や上坑などの出土遺物（長谷川ほか2010）を見ると、口縁部に有刻隆帯を持ち、沈線間に縄文が施文される文様が見られるものや、「8」の字状貼付文を持つもの、"福田類型"の注口土器が見られるなど、本遺跡と共通する特徴が多々見受けられる。したがって本調査出土遺物の大半は、時間幅を持つものの堀之内2式土器の範疇におさまるといえる。

次に土器組成の点から各地の状況と比較したい。本調査区における遺物量は第12表に示した通りである。出土遺物の総重量は土器・土製品が13431g、石器やフレークが6001g、合計19432gである。出土資料は、とりわけ深鉢が多い。そのため深鉢は部位や装飾によって分類別に計量した。本調査における土器組成で特徴的であるのは、無文土器が多く体部破片で特に口立つことである。上部に文様を伴う可能性も考えられるが、この状況は林中原Ⅰ遺跡SI01や長野県村東山手遺跡（鶴田ほか1999、綿田2010）でも見られる。次に底部の網代痕と無文の割合を見てみると、21点中網代痕16点（76.19%）、無文5点（23.80%）である。数量が少なくやや信頼性に欠けるが、神奈川県千手ノ台遺跡（秋田2005）などの例に類似する。なお、本報告書では文様を分類して計量を行わなかったが、"右神類型"は、799点中1点（第9図22）のみ確認できた（0.13%）。

上述の綿田弘実氏の研究（鶴田2010）では、長野県内の"山岳洞窟遺跡"と"平地遺跡"の土器組成について論じられている。遠隔地の事例だが、本調査の状況は"平地遺跡"の事例と似通っている。しかし本調査では、深鉢以外の土器が極端に少ない点に注意しなければならない。部分的な調査なので組成に偏りがある、生活様式が異なるなどの可能性が考えられる。この違いを考える際に石鏃などの狩猟具の少なさに触れたい。

今回報告した資料のほかは、石皿の破片、磨石、凹石が1点ずつで残りはフレークである。つまり、狩猟具より植物加工に使う石器が多いといえる。本遺跡付近の当時の人々が、生業を植物質食料の採集・加工により重点を置いているならば、例えば堅果類の灰汁抜きに使用する深鉢が多くなる現象は肯定することができる。

以上をまとめると、①本調査では上坑2基と遺物包含層を確認した。②出土資料の大半は遺物包含層中層のもので、林中原Ⅰ遺跡SI01や前中後遺跡のものと共通する特徴を持つ。③これらは堀之内2式土器に該当し、本来の遺物包含層は堀之内2式期の単純層であったとも考えられる。④土器組成は堀之内2式期の"平地遺跡"と類似する。⑤土器組成の偏りの原因は、部分的な調査であったこと、石器組成から考えられる生活様式などが挙げられ、複数の要因が重なったとも考えられる。最後に、本遺跡の周囲では縄文時代後期の遺跡・資料が少なく、今回の調査で得られた資料は、この地域の研究にとって重要なものとなるであろう。

〈参考文献〉

秋山かな子　1997「石神類型"覚え書き"」『東海大学校内遺跡調査団報告』7

――　2005「堀之内2式期"加曽利E土器"関内の一断面―同地区遺跡における"長沢作港神上器"の存在形態―」『土器考古』第29号　土器考古学研究会

石井　寛　1984「堀之内2式土器の研究（予収）」『駒沢研究集録』第5号　慶北ニュータウン型風文化財調査団

――　1995「原川口遺跡20号住居址出土土器群をめぐって」『川原内遺跡群・根岸山遺跡』郷土山遺跡」郷土山ふるさと歴史研究

尾形秀夫　1988「遺跡の動態と集団関係―縄名山南麓における縄文時代遺跡の現状と課題―」『研究紀要』5　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

加藤　寛　2006「縄文時代土器」『加曽利　縄文を掘る』博アム・プロモーション

群馬県史編さん委員会　1988『群馬県史　資料編1　原始古代1』歴史民

鈴木徳雄　1999　無名土式期土器型の復習―福之内1式期における小仙塚類型の形成―」『縄文と弥論集―縄文セミナー10周年記念論文集―』縄文セミナーの会

――　2002「北関東における縄之内式の展開―地域的様相と"転型"の概念―」『第15回縄文セミナー　後期前半の再検討』『同記念誌』縄文セミナーの会

谷藤保彦　1990「長野県・後期前葉の土器群」『第4回縄文セミナー縄文後期の諸問題』前文セミナーの会

勝利貞昭ほか　1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書8―浅野市内その1・村山小学遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告44　長野県埋蔵文化財センター

富田孝彦　2010「林中原Ⅰ遺跡第一次人発用住宅に伴う発掘調査報告書―」長野県打田埋文化財調査報告書20集　長野県教育委員会

長野市埋蔵文化財　2010「前中後遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区」『長野市埋蔵文化財発掘調査報告書21集　長野市教育委員会

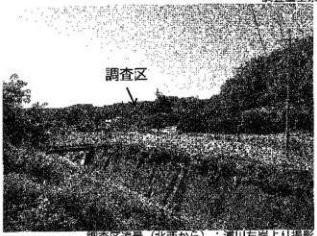
長野県埋蔵文化財センター　1975『笠岡市遺跡』長野県教育委員会

山内清男　1940「縄之内式」『日本先史土器図譜』第V輯　先史考古学研究会

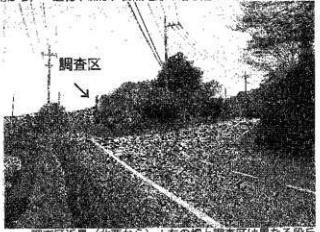
鈴山孝雄　1999「『山田水系における縄文小形家屋土器群―転換『斜面構造土器』の再検討―」『縄文土器論集―前文セミナー10周年記念論文集―』縄文セミナーの会

――　2010「中部山岳洞窟遺跡の縄文土器―長野県飯綱高原周囲の堀之内2式期土器を中心に―」『縄文研究』第21号　縄文研究文化研究会

調査区全景（南から）：遺物や礫は、自然地形の落ち込んだ側から特に出土

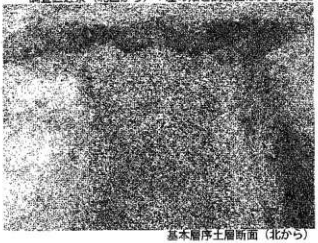


調査区遠景（北西から）：瀬川左岸より撮影



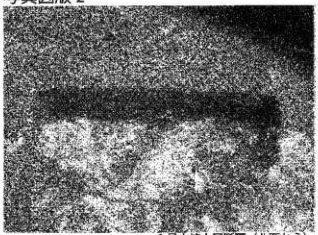
調査区近景（北西から）：左の畑と調査区は異なる段丘

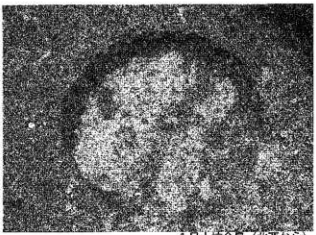
表土掘削状況（北西から）

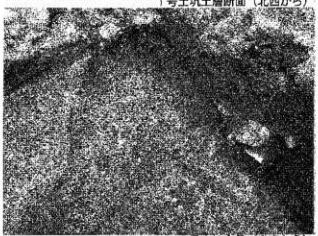


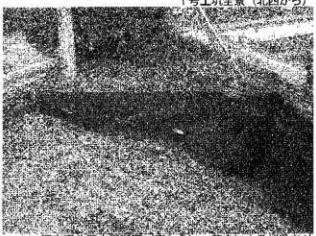
基本層序土層断面（北から）

写真図版 2

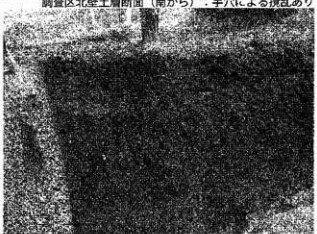

1号土坑土層断面（北西から）

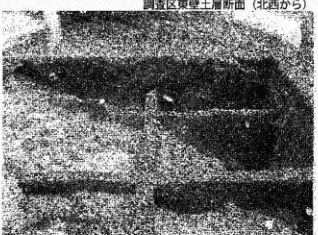

1号土坑全景（北西から）


2号土坑全景（南東から）

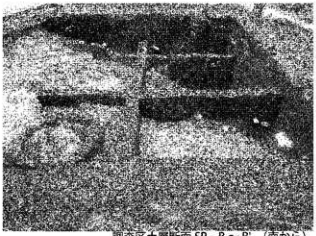

調査区北壁土層断面（南から）：半パによる撹乱あり

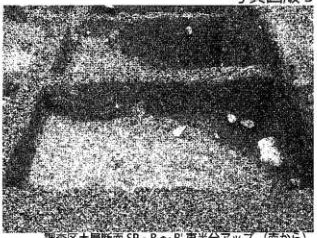
調査区東壁土層断面（北西から）

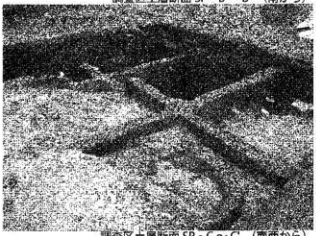

調査区東壁 Hr-FA・AS-C検出状況（西から）


調査区土層断面 SP-A～A′（南から）

調査区土層断面 SP-A～A′東側アップ（南から）

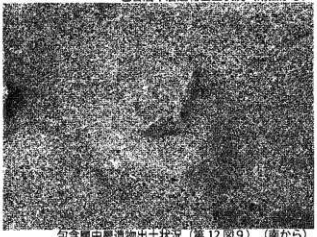

調査区土層断面 SP - B～B' （南から）


調査区土層断面 SP - B～B' 東半分アップ （南から）


調査区土層断面 SP - C～C' （東西から）

包含層中層遺物出土状況（南西から）

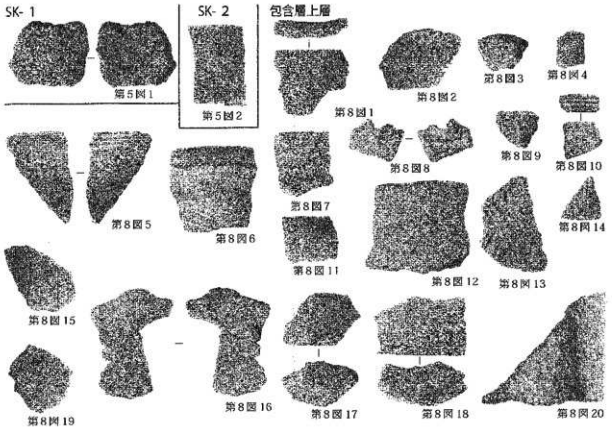
包含層中層ナンバリング資料など出土状況（南西から）

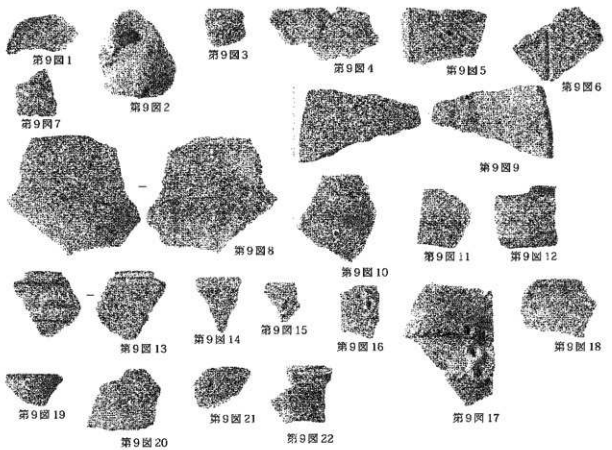

包含層中層遺物出土状況（島 12 図 9）（南から）

自然地形検出状況（南東から）

調査風景（南西から）

写真図版 4

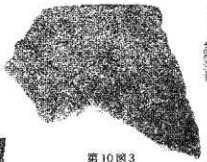

SK- 1
第5図1
SK- 2
第5図2
包含層上層
第8図1
第8図2
第8図3
第8図4
第8図5
第8図6
第8図7
第8図8
第8図9
第8図10
第8図11
第8図12
第8図13
第8図14
第8図15
第8図16
第8図17
第8図18
第8図19
第8図20

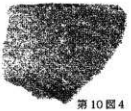

包含層中層
第9図1
第9図2
第9図3
第9図4
第9図5
第9図6
第9図7
第9図8
第9図9
第9図10
第9図11
第9図12
第9図13
第9図14
第9図15
第9図16
第9図17
第9図18
第9図19
第9図20
第9図21
第9図22

包含層中層

第10図1

第10図2


第10図3


第10図4

第10図5

第10図6

第10図7

第10図8

第10図9

第10図10

第10図11

第10図12

第10図13

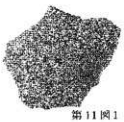
第10図14

第10図15

第10図16

第10図17

第10図18


第11図1

第11図2

第11図3

第11図4

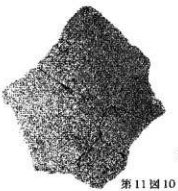
第11図5

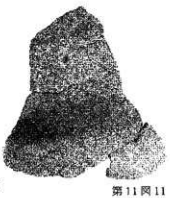
第11図6

第11図7

第11図8

第11図9


第11図10


第11図11

第11図12

第11図13

第11図14

第11図15

第11図16

第11図17

第11図18

第11図19

第11図20

第11図21

写真図版 6

包含層中層

第12図1

第12図2

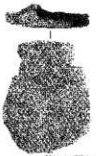
第12図3

第12図4

第12図5

第12図6

第12図7


第12図8

第12図9

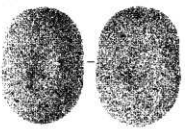
第12図10

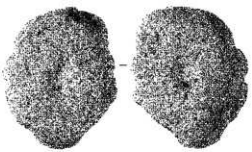
第12図11

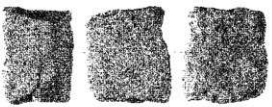
第12図12

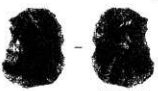
第12図13

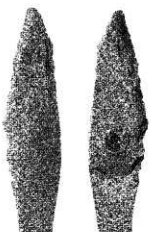
第12図14

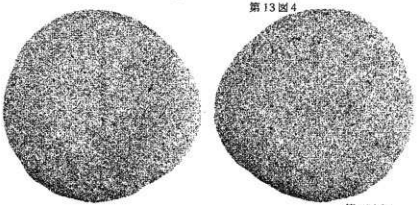

第12図15


第13図1


第13図3


第13図4


第13図2


第13図5

包含層下層

第14図1

第14図2

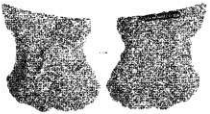
第14図3

第14図4

第14図5

試掘

第15図6


第15図7

撹乱

第16図8

第16図9

第16図10

第16図11

第16図12

第16図13

第16図14

第16図15

第16図16

第16図17

第16図18

第16図19

第16図20

表土

第16図21

発掘調査報告書抄録

ふりがな	ぜんじ・すわいせき
書名	善地・諏訪遺跡
副書名	鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第283集
編著者名	田口一郎・向出博之
編集機関	高崎市教育委員会
所在地	〒370-8501　群馬県高崎市高松町35番地1
発行年月日	平成23年3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ぜんじ すわ 善地・諏訪	たかさきし 高崎市 みさとまち 箕郷町 ぜんじ 善地 あざすわ 字諏訪 ばんち 1195番地 1	102024	489	36° 24′ 40″	138° 55′ 51″	2010.9.28 ～ 2010.10.15	29.16㎡	鉄塔施設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
善地・諏訪遺跡	集落	縄文時代	遺物包含層　1箇所	縄文土器・石器	遺物包含層では、堀之内2式期の資料を中心とした土器や石器が出土した。
		近現代	土坑　1基	縄文土器	
		時期不明	土坑　1基	縄文土器	

高崎市文化財調査報告書　第283集
菅地・諏訪遺跡
―鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査―

平成23年3月24日印刷
平成23年3月24日発行

編集　高崎市教育委員会
発行　高崎市教育委員会
印刷　上毎印刷工業株式会社